

## 附錄 未來觀念の現世に於ける事業に及ぼす勢力

余輩は未來に來らんとする報果ほうくわの爲めに現世に於て善業に従事せざるなり、善の善なると神の神たるとは未來の存すると存せざるとに關せざるなり 聖なるギヨン婦人の云へる如く神は神自身の爲めに愛すべきものにして彼の我等に賜ふ恩惠の爲めに愛すべきものにあらず、死後の快樂の爲めに今世に於て勞するものは老後の快樂を得んが爲めに其子を教育する父母と均しく利己的世界的現金的精神にして基督教の精神にあらざる事は余輩の斯に論究するを要せざるなり

然れども若し論者ありて未來の觀念は余輩の今世に處するに於て不<sup>○</sup>必<sup>○</sup>要<sup>○</sup>なりと認むるあらば、若し人世は未來の觀念を要せずして救ひ得べきものなりと信ずる人あらば、余輩は眞理の爲め、基督教の爲め、人類一般の進歩の爲め、徹頭徹尾之に反對せざるを得ざるなり

基<sup>○</sup>督<sup>○</sup>教<sup>○</sup>の<sup>○</sup>未<sup>○</sup>來<sup>○</sup>を<sup>○</sup>説<sup>○</sup>く<sup>○</sup>や<sup>○</sup>果<sup>○</sup>報<sup>○</sup>的<sup>○</sup>に<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ず<sup>○</sup>して<sup>○</sup>慰<sup>○</sup>藉<sup>○</sup>的<sup>○</sup>な<sup>○</sup>り、基督教は人に向て「汝惡を避け善を爲すべし、然らば未來の幸福あらん」と云はずして「汝は幻の如き今世を以て終るべきが如き價值なきものにあざれば宜しく永遠の生を有するものゝ爲すべき言行を遂げよ」と云ふなり、未來の存在は推理上免るべからざる結果にして人の善行を勵まさん爲めに製造せし假定説にあらず、未來の存在は宇宙の一大眞理なれば之を信ずると信ぜざるとは其人の今世に處するに當て大關係あるは明らかなり

論者或は云はん世に未來を信ぜずして大事業を遂げ人類に大幸福を與へし人<sup>すくなし</sup>とせず、孔子の如きあり、我

國數多の先達者の如きあり、殊に(論者の語に依れば)基督降世かうせいぜん前猶太國の愛國者預言者の如きあり、故に未來の存在は現世に於て愛の事業を達するに於ては必要なしと、余輩若し此種の論者の論理を用ゐ他の眞理に應用する時は意外なる論結に達するを見るべし 即ち世に神の存在を信ぜずして大事業を遂げし人も尠しとせず、孔子の如き釋氏の如き我國多數の大英雄の如き其他歐米各國に於て無神論者にして慈善事業に従事し自由發達の爲め智識進歩の爲め功勞多きもの少しとせず、然らば神の存在は人の愛心を勵まし現世に於ける善事業に従事するに於て不必要となすか、無神論者の有神論者を嘲ける蓋し此點に存するなり、彼等は云ふ義は義其物の爲めに尊べきものにして神あるが故に採るべきものにあらざ、神の存在は純粹なる倫理を實行するに於ては不必要なりと、然れども余輩基督教を信ずるものは上帝の存在を以て論理上倫理上必要と認むるなり、余輩は有神論を以て最も高尚にして且つ永遠に迄維持すべき德義を發達するに於て大必要な定理と信ずるものなり、誰か園藝師が植木鉢内に於て花を開かしめ菓を結ばしむるを得るが故に蒼天耕地を以て不必要と見做すものあらんや、未來の觀念を去て完全なる現世的の事業に従事せしめんとするは狹隘なる溫室内に於て萬斛の米麥を耕やし百菓を實らせんとすると同一轍迂遠の思考と去はざるを得ず

舊約時代の愛國者預言者が未來の觀念を有せずして現世的改良を遂げしと論ずるものありと雖ども是れ未來存在問題に關しては勢力なき議論と云はざるを得ず、彼等は未來の觀念を有せしや有せざりしやは聖書批評學上の大問題なり、近世の批評學者が舊約聖書中より未來の觀念を除き去らんとするは中古以來の神學に對する反動にあらざやとの疑問は公平なる聖書研究者の胸中に起る問題なり、然ども假に論者の言に任せモーセが生命の記錄

より我名を削除せよと言しも、ヤコブヨセフが其父に迄歸りしとの言もヨツブ書中にある數多の未來的の言語も余輩の稱する未來とは少も關係を有せざるものと假定せよ、然らば未來の觀念は宗教上不必要となすか、余輩の信ずる處に依ればユダヤ教の基督教に劣る一大理由は、舊約時代の宗教家の新約時代の宗教家に及ばざる一大原因<sup>げん</sup>は、彼の未來の觀念は朦朧不明にして是は確實明瞭なりしに依<sup>よ</sup>なり、舊約書は云へり「悔改めよ神は國家の隆盛と人々の幸福とを以て汝等を恵まん」と、新約書は云へり「汝等我弟子たるものは世に忌まれ退けられ終に汝等を殺すに至らん、弟子は其師に勝る能はず世若し我を十字架に擧げしならば汝等をも迫害せずして止まざるべし然ども終まで忍ぶものは幸福なり天國の冠は汝等のものなればなり」と 現<sup>げん</sup>世的<sup>てき</sup>の賞與<sup>じやうぎ</sup>は舊約の精神<sup>しんしん</sup>にして新約は現世に於て其信徒に約するに艱難<sup>げんなん</sup>貧苦<sup>ひんこ</sup>迫害<sup>ぱくがい</sup>を以てせり、舊約教は現世的宗教なりしも新約教は其信徒の理想を現世以外に索<sup>ひきだ</sup>せり、十九紀將に終らんとする今日に當て誰か狹隘<sup>きやくがい</sup>なる舊約教に戻らんとするものならんや人の信仰は眼を以て觀察し得べき事業を以て評する能はざるなり、若し現世に於ける善事業を以て宗教の最大目的と見做す時は歷史上實檢上余輩の解すべからざる事實一にして足らざるなり、歐洲中古の學術技藝を維持せしものは巴里羅馬の基督教にあらずしてコルドバアラハムブラの回々教なりしは如何、世に所謂社會改良に熱心にしてその私德に至ては余輩をして寒心<sup>かんしん</sup>せしむるものあるは如何、人はその現世に於て爲せし事業に従ひ裁判すべきものにあらざる事は基督教の教義と信ずるなり、詩人ローエル曰く

\* Not failure, but low aim is crime.

(罪は事業の失敗にあらずして目的の卑陋<sup>ひらう</sup>なるにあり)――

宗教の目的を以て重に現世に存すものなりと云ふは宗教の宗教たる價值を取去るものにして其人生を高尙ならしめ其是を慰め是を勵まし是を普通人間以上の人間たらしめんとするに當て功何處に存するかを知る能はざるなり

救、靈、上、善、行、に、價、値、を、置、か、ず、し、て、善、行、を、勵、ま、す、に、最、も、力、あ、り、し、も、の、は、基、督、教、な、り、  
比、較、上、現、世、は、殆、ん、ど、顧、み、る、に、  
足、ら、ざ、る、も、の、と、見、做、し、て、現、世、を、救、ひ、進、歩、せ、し、め、し、に、於、て、最、と、も、功、あ、り、し、も、の、は、基、督、教、な、り、  
ユ、ニ、タ、リ、ヤ、ン、教、の、オ、  
ル、ソ、ド、ツ、ク、ス、教、を、攻、撃、す、る、や、そ、の、善、行、を、輕、ん、ず、る、を、以、て、せ、り、  
曰、く、オ、ル、ソ、ド、ツ、ク、ス、教、は、人、を、怠、慢、な、ら、し、む、る、の、教、  
に、し、て、基、督、は、萬、人、の、罪、を、贖、ひ、し、と、の、教、義、は、人、を、敗、德、に、導、く、も、の、な、り、と、  
然、れ、ど、も、實、際、上、善、行、を、以、て、世、を、益、せ、し、人、  
は、多、く、此、贖、罪、の、教、義、を、以、て、城、壁、と、な、せ、し、人、に、多、き、を、如、何、せ、ん、  
余、輩、今、こゝに、此、逆、説、(Pardon)に、就、て、論、ぜ、ざ、る、べ、し、  
然、れ、ど、も、ユ、ニ、タ、リ、ヤ、ン、教、が、贖、罪、説、を、見、る、實、に、淺、薄、な、る、を、云、ふ、な、り、  
人、は、未、來、の、存、在、を、信、ぜ、ず、し、て、現、世、に、於、て、充、分、  
の、事、業、を、爲、し、得、べ、し、と、論、ず、る、も、の、或、は、未、來、の、存、在、を、信、ず、る、は、利、己、的、の、精、神、に、出、づ、る、も、の、に、し、て、宗、教、の、大、眼、目、は、現、  
世、改、良、進、歩、に、あ、り、と、見、做、す、人、は、余、輩、は、贖、罪、説、を、輕、視、す、る、ユ、ニ、タ、リ、ヤ、ン、教、徒、と、同、視、せ、ざ、る、を、得、ざ、る、な、り

社、界、改、良、な、り、現、世、的、事、業、な、り、共、に、此、唯、物、的、の、社、界、に、於、て、は、最、も、響、能、き、最、も、勇、壯、ら、し、き、言、語、な、る、が、如、し、と、雖、ど、も、  
一、步、を、進、め、て、改、良、事、業、な、る、も、の、は、如、何、な、る、も、の、な、る、乎、を、究、む、る、時、は、余、輩、之、に、判、然、た、る、定、義、を、付、す、る、に、困、<sup>くる</sup>し、む、な、り、  
若、し、是、を、家、庭、の、改、良、教、育、の、擴、張、慈、善、の、實、施、教、會、の、進、歩、と、云、は、ん、乎、  
是、等、の、事、業、は、人、生、の、目、的、に、あ、ら、ず、し、て、そ、の、目、  
的、に、達、す、る、法、方、<sup>○</sup>な、り、  
又、人、生、の、最、終、目、的、は、如、何、と、の、問、題、に、對、し、未、來、永、遠、の、存、在、を、刪、除、<sup>さじよ</sup>し、て、如、何、に、し、て、人、靈、を、満、足、  
し、得、る、解、明、を、得、べ、き、や、知、る、能、は、ざ、る、な、り、  
記、者、永、く、慈、善、病、院、に、職、を、採、れ、り、  
而、し、て、之、に、治、療、を、乞、ふ、も、の、又、之、に、從、

事するものに於て常に無上の獎勵と慰とを與へしものは未來の觀念なり、病慢性に變じ全治の望全く絶ゆるに及んで尙ほ微笑以て天命に安んじ「モルヒネ」劑もコロ、ホルムも效を奏せざるに際し能く病者の苦痛を宥むるものは未來存在の觀念なり、又看護に従事する人に於ても幾多の堪忍は少しも効果を奏せざるが如く身軀疲れ精神撓む時に當て獨り患者の床側せうそくに於て心中贊美の聲を發せしむるものは未來存在の觀念なり、人は義務としてのみ愛の事業に従事すべしとは是其人の生涯に於て内に戰ふべき罪戾なく外に處理すべき艱難なき時に發するを聞くと雖ども一身上に於て社交上に於て自己の理想の悉く反する時、心中の暗夜は力に力を加ふれ共尙ほ消滅せざる時に當て未來觀念なくして能く堪ゆべけんや

休言せよ未來の觀念に由らずして現世に於て基督教徒の事業を爲し遂げべしと、此觀念を有せざるが故に億萬の人靈は卑陋なる思想の内に沈みついあるなり、此思想の確實ならざるが故に幾多の教役者の事業に心情なく推察力なくその牧する教會に生命なきなり、未來觀念を有せざる宗教は宗教にあらざるなり

未來觀念の現世に於ける事業に及ぼす勢力は實に最大なるものなり

一、未來觀念に依てのみ現世の眞價直を知るを得るなり、現世は現世の爲めに價值あるにあらずあたか恰も學校は學校其物の爲めに價值あるにあらざるが如し、業を卒て後働くべき社界あるが爲に學校の用あるが如く人生五十年間は永遠なる未來に入るの習鍊所として無上の價直を有するなり、現世は人靈の教育所として見るべきも之を永住の家として見るべからざるなり、余輩現世に於て事を爲すに當て此觀念を有するとは余輩心情の傾向に於て事業の性質に於て非常の差異あるは明かなり、見よ幾多の不平は未來觀念を有せざるより生ずるを見よ

幾多の事業は此觀念を有せざるが故に速成疎漏<sup>そくせいそろう</sup>を以て終るを、現世の事業は事業其物の爲めにあらずして是に従事するものゝ之に由て得る經驗、鍛鍊、堪忍、愛心にあるなり、基督教は事業よりも精神を尊ぶものなり、それは精神は死後永遠迄存するものにして事業は現世と共に消滅するものなればなり、支那宣教師某卅年間傳道に従事し一人の信徒を得ず、然れども喜悅以て今世を逝<sup>き</sup>れり、彼は得し處なかりしや、否な、師父ザビエーは東洋に於て百萬人以上に洗禮を施したりと雖ども恐くは現世より得し眞結果に於ては此無名の一宣教師に及ばざりしならん、嗚呼事業よ々々々幾千の偽善と卑劣手段と嫉妬と争とは汝の名に依て惹起されしや

二、未來の感念あるが故に余輩は心に平和あるなり、而して安心は事業の成功上最も緊要なるものなり「急げば事を爲損<sup>しそん</sup>ずる」との諺は余輩の皆實驗する處なり怡然<sup>いぜん</sup>として余裕なきものにして大事業を遂げしものあるを聞かず 一年間に必ず某事業を爲さざるを得ずとか一生中某事業を終へざれば地下に瞑する能はずとの心組は其事業を完備する能はざるの徵候なり、五十年を以て存在の極と認むるものは五十年の業を爲し永遠を以て人生の有生期限と信ずるものは永遠に互る事を爲し得るなり、使徒保羅の現世的事業は彼の將<sup>まさ</sup>に今世を辭せんとする時は殆ど皆無に歸せしが如くなりと雖も尙ほ壯士の大望を懷て斷頭場の露と消へしとき彼に未來永遠の望ありしが故なり、未來觀念を有せざるの人の現世に於ける事業は知るべきのみ 獨相ビスマーク曰く「余にして詩人の稱する未來なかりせば余は一日も余の責任に堪ゆる能はざるなり」と詩人ゲーテ曰く「急ぐな休むな」と 然ども若し人間の發達は現世を以て終るものとせんか眞率實直の士如何で急がざるを得んや 聖アウガスチン永遠の救を信じて後曰く「余に此信仰なかりせば余は急激突進の爲め何事をも爲し能はざりしならん」と ビルマ傳道師ジャ

ツドソン氏死せんとする時神に祈て曰く「余に尙ほ數年の命を與へよ永遠の休養余の前にあれば余は尙ほ今世に於て働きたく願ふなり」と、休言せよ未來の觀念は現世に於ける事業に關係なしと

三、未來の觀念は救靈上の必要なり、保羅曰く我儕は望に由て救はるゝなりと是心靈上深遠なる實驗にして能希望なるものゝ人靈に及ぼす最上の勢力を示せし語なり、希望は生命の特徵にして希望失して生命あることなし、農夫炎天に耕すは秋冷の候收穫の希望あればなり、漁夫蒼海に釣を垂るは晩景に及で岸に近くや其妻子に迎へられて漁獲を祝せらるゝの希望あればなり 希望を去て人世のあるなし 希望は實に人世なり

然りと雖現世の希望は有限の半を繋ぎ得ると雖無限の生を有する人靈は現世的の希望を以て満足し得べきものにあらず酋長タマールが歐亞兩大陸各半分を得て尙地球表面の狹隘なるを嘆ぜしが如く 佛王ルイ十四世が無上の榮華と勢力に達してなほベルセールの宮殿に於て悲哀以て老年を終りし如く、詩人ゲーテが文人として達し得べきの名譽の内に存在しながらなほ余の一生中快樂を感じしは僅に二週間なりしといひし如く、如何に現世を利用するとも人靈は之に依て棲息し得べき者にあらざるなり 又余輩心靈上の實檢よりいふももし現世のみにして人靈存在の極と見なすときは最も成功ありし生涯も失敗失望といはざるを得ず或人いへるあり「人各其理想に達せしときは即ち命を終るのときなり」と 現世を以て常に不満足を抱くは必しも失意失望の人のみにあらず、然るに此失望世界に立ち死すとも尙ほ望を失はざらしむるものは未來永遠の觀念なり、高潔なる思想が世の愚昧壓制に遇て終に發表し能はざる時、純白直實なる信仰が迷信偽善の爲めに迫害せらるゝ時、忠義貞操は蟄居して凡夫奸婦の世に蟠かまる時、未來觀念を除ひて何をか以て義士の希望となり貞婦の勵

となるものあらんや、余輩は永遠の罰を懼<sup>おそ</sup>れて惡を避け、賞を得るが爲めに善を爲さずと雖ども(假令如斯き事は出来き得べきとするとも)無限なる未來の希望は余輩の心靈をして有限界以上に逍遙せしめ下等肉慾の支配より免かれしむるものなり、基督教の與ふる未來の希望を以て、回々、教其他の宗教の與ふる肉情的の未來快樂と同視し、此希望を以て棲息するものを評して異教的基督教信徒と云ひ現世的宗教を勸むるものは余輩の解する能はざる處なり、

未來觀念の現世事業に於ける勢力斯の如し 而して余輩これを歴史に徴するに永遠至大の事業を遂げし人は未來觀念の最も確實なりし人なり、若し主耶穌基督<sup>イエスキリスト</sup>の一生を現世的事業上より評せんか、余輩之を失敗の生涯と云はざるを得ず、然れども彼の事業は此世界消去<sup>きんきつ</sup>て後尙存<sup>なほ</sup>するものなれば彼は他人を救ひ得しも自身を救ひ得ざりしなり、誰か使徒保羅の一生を評して彼の心中に存せし未來永遠の榮光たる一大希望が彼れをして現世の快樂を見る塵埃<sup>ちんわい</sup>の如くならしめ百難千苦に遇ふも殆んど無感覺たらしめし原動力なりしを見る能はざるものあらんや、ボスボラス岸邊に於て王冠を戴く奸婦ユードキシヤの膽<sup>き</sup>を冷し直言終<sup>つひ</sup>に身を山間僻地に退け愁苦以て生を終りし金口クリソストムの宗教は所謂現世的宗教なりしや、無限の威力を有し勝ち誇りたる羅馬の軍を率ひ將に凱旋の讚美を奉げんとしミラン府の天主堂に入らんとする帝王テオドシユスを門に支へて入るを許さず終に數十日の懺悔を爲し悔悟の狀を呈せしめし豪勇なる聖アムブローズの宗教は未來觀念たる深遠なる思想を以て充ち滿たる宗教ならざりしや、歴史家フルード云へるあり 清黨時代の英國は世界歷史上最大英雄を生ぜし時代なりと、而して清黨時代より未來觀念を取り去らば其最も高尚なりしもの最も尊敬すべきもの最も男らしきもの最も偉大

なりしものを取り去るなり、ミルトンの詩篇より未來觀念を取り去りて見よ 誰かその絶世の優美を賞するものあらんやボンヤンの天路歷程より未來觀念を取り去りて見よ無數讀者をして感涙袖を濕さしめし祕密を取り去りしなり、未來觀念を有せざるものとして無冠大王コロムエルの生涯を許し見よ 意義なき目的なき偽善的の最も惡むべき生涯なり、此觀念を以てペーンは頭を白刃に當てたり、此觀念を以て老牧師ロビンソン神を讚美しつゝ世を去れり 「自由發達に於て最も功勞ありしは十七世紀の英國人なり 而して未來觀念の最も確實なりしも十七世紀の英國なりき」余輩更に何を言んや 若し詩人ダンテ、改革家ハッス、探研家コロムブス、哲學者ベーコン、天文學者ガリリオ、科學者ニュートン、樂譜家ハンデル、慈善家ハワード、愛國者ジョン、ブラウン等の事を言んには時足らざる也

想ひ見る十三世紀の中頃に當てギリシヤの文學并に美術の復興と共に人類は再び現世を以て樂園視するに足れり蓋しギリシヤ文明たるや現世的文明にして現世はギリシヤ人の極樂たりしなり、基督教未來を説くに及んでギリシヤ的觀念頃に衰へ終に中古暗黒時代となるに當て高尚なる基督教的未來觀念は變じて無賴怠惰なる隱遁僧侶の爲めに濫用せられその非常の感化力を失ふに至れり 其反動たる復興時代の現世的宗教となり變じてメヂチ家の文明教(Paganism)となり、終にボルギヤ家の偶像教(Heathenism)となるに至れり、然れども詩人ダンテの如き改革家サボナローラの如きありて一方には當時の淺薄なる思想を攻撃し他方には隱遁主義に反對し能く基督教最始の思想を傳へしに依り改革時代の至ると共に宗教の教理と世の文明と共に并行するに至れり、然るに又十六十七兩世紀の宗教的の文明と文明的の宗教は十八世紀の始に當て生命なき乾奏せる定義教(Dogmatism)と化して天

國の鍵は再び神學者てふ一種の階級の手に歸するに及んで獨逸にレッシングなる巨人起りて一拳を此老朽人ろうきうじん（神學者を指す）の頭上に加へしよりゲートゲート之に和しシレルシレル之を輔たすけ終に十九世紀今日の思想を胚胎するに及べり蒸氣電氣の發明學術の進歩憲法政治の發達は現世をして再び快樂なる住家となせり 現世を改良すべし之を天國と爲し得るなりとは十九世紀今日有望家の夢想にしてペリクルスペリクルス雅典あてんすを支配せし時ロレンゾロレンゾがフロレンスの權力を握りし時同じく發せし夢想なりき 然れども夢想は事實より大なる事能はざるなり、現世は價直なきものにはあらざれ共永遠の價直を有するものにあらざるなり、人類は現世を樂しみ得べきも未來の希望を有せずして樂しむ得べきものにあらず、余輩基督信徒たるもの時勢を利用する事あるとも何んぞ時勢の子供となるべけんや、基督の贖罪未來の存在共に余輩の頼むべき大磐石にして世の之に對する思想は如何に變化するとも余輩の之に對する信仰と希望は昨日も今日も明日も變ずべからざるなり

私たちは、来たるべき報いのために現世で善行を行うのではない。善が善であること、神が神であることは、未来が存在するかどうかに関係ない。

聖なるギヨン夫人(ジャンヌ・マリー・ブーヴィエ・ド・ラ・モット)ギヨン、十七世紀フランスのカトリック神祕家)が言ったように、神は神自身のために愛すべきものであり、神が私たちに与える恵みのために愛すべきものではない。死後の快樂のために現世で働く者は、老後の快樂を得るためにその子を教育する親と同じく、利己的で世俗的、現金主義的な精神であり、キリスト教の精神ではないことは、論を待たない。

もし、「未来の観念は現世で生きる上で不必要である」、「未来の観念がなくても人生は救われ得る」と信じる論者がいるならば、私は真理のために、キリスト教のために、そして人類全体の進歩のために、徹底的にその意見に反対せざるを得ない。

キリスト教が未来を説くのは、報償を目的とするのではなく、慰めを与えるためである。キリスト教は人に「悪を避け、善を行えば、未来の幸福があるだろう」とは言わない。そうではなく、「あなたは幻のようなこの世で終わるほどの価値のない存在ではない。永遠のいのちを持つ者にふさわしい言動を実行しなさい」と言うのである。

未来の存在は、論理的に避けられない結果であり、人の善行を促すためにでっち上げられた仮説ではない。未来の存在は宇宙の大きな真理であるから、それを信じるか否かは、その人の現世での生き方に大きく関わることは

明らかだ。

論者は「世には未来を信じずに大事業を成し遂げ、人類に大きな幸福を与えた者が少なくない。孔子やわが国の先達者、特にキリスト降世以前のユダヤの愛国者や預言者のような人々がいる。ゆえに、愛の事業を達成する上で未来の存在は現世には必要ない」と言うかもしれない。私がもし、この論者の論理を他の真理に当てはめるならば、思いがけない結論に達するだろう。つまり、神の存在を信じずに大事業を成し遂げた人も少なくない。孔子や釈迦、わが国の偉大な英雄、その他欧米の無神論者で慈善事業や自由・知識の進歩に多大な功績を残した者は少なくない。そうすると、「人の愛する心を励まし、現世で善事業を行う上で、神の存在は不必要だ」ということになるのだろうか。無神論者が有神論者を嘲笑するのは、おそらくこの点である。彼らは「義はそれ自体のために尊いのであつて、神がいるから採用すべきではない。純粹な倫理を実行する上で、神の存在は不必要である」と言う。しかし、私たちキリスト教徒は、神の存在を論理的にも倫理的にも必要不可欠だと認めている。有神論こそが、最も高尚で永遠に維持すべき徳義を発達させるために大いに必要な原理だと信じる。園芸師が鉢植えて花を咲かせ実を結ばせることができるからといって、広大な空と耕地を不必要と見なす者がいるだろうか。未来の観念をなくして完全な現世的な事業に従事させようとするのは、狭い温室の中で莫大な米や麦を耕し、すべての果実を実らせようとするのと同じく、非現実的な考えと言わざるを得ない。

旧約時代の愛国者や預言者が未来の観念を持たずに現世的な改良を成し遂げたという議論は、未来の存在問題に関しては影響力のないものだと言わざるを得ない。彼らが未来の観念を持っていたかどうかは、聖書批評学上

の大問題である。近世の批評学者が旧約聖書から未来の観念を取り除こうとするのは、中世以来の神学に対する反動ではないかという疑問は、公平な聖書研究者なら抱くはずだ。仮に論者の言う通り、モーセの言葉も、ヤコブやヨセフの言葉も、ヨブ記の未来的な言葉も、私たちが言う未来とは全く関係がないものだとは仮定してみよう。

そうであれば、未来の観念は宗教上不必要となるのだろうか。私が信じるには、ユダヤ教がキリスト教に劣る最大の理由は、また旧約時代の宗教家が新約時代の宗教家に及ばない最大の原因は、前者の未来観念がぼんやりとして不明瞭であつたのに対し、後者のそれは確實で明瞭であつたことによる。旧約聖書は「悔い改めよ。神は国家の隆盛と人々の幸福をもつてあなたたちを恵むだろう」と言った。一方、新約聖書は「私の弟子であるあなたたちは世に憎まれ、退けられ、ついには殺されるだろう。弟子はその師に勝ることはできない。もし世が私を十字架にかけたならば、あなたたちをも迫害せずには止まないだろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は幸福である。天国の冠はあなたたちのものとなるからだ」と言った。現世的な報償は旧約の精神であり、新約は現世においてその信徒に艱難、貧苦、迫害を約束した。旧約の教えが現世的宗教であつたのに対し、新約の教えはその信徒の理想を現世の外に引き出した。十九世紀の終わりに立つ今日、誰が狭い旧約の教えに戻ろうとするだろうか。

人の信仰は、目に見える事業をもつて評価することはできない。もし現世における善事業を宗教の最大目的と見なすならば、歴史上、また実際上の検証において、理解できない事実が数多く出てくる。ヨーロッパ中世の学術や技芸を維持したのは、パリやローマのキリスト教ではなく、コルドバやアルハンブラのイスラム教であつたのはなぜだろうか。世にいう社会改良に熱心でありながら、その私生活における徳義に関しては、私たちを失望

させる人がいるのはなぜだろうか。人はその現世で行った事業に従って裁かれるべきではないことは、キリスト教の教義だと信じる。詩人ローエルは言う。

罪は事業の失敗ではなく、目的の卑しいことにある

宗教の目的を主に現世にあるものだとすることは、宗教が宗教である価値を奪うものであり、それが人生を高尚にし、慰め、励まし、普通の人を超えた人間たらしめる上で、どのような功績があるのかを知ることができない。

魂の救いの上で善行に価値を置かず、それにもかかわらず善行を最も強く促したのはキリスト教である。現世を顧みるに足らないものと見なしていながら、現世を救い進歩させた上で最も功績があつたのもキリスト教である。ユニタリアン教が正統派（オルソドックス）を攻撃するのは、彼らが善行を軽んじると見なしたからである。

ユニタリアン教徒は「正統派の教えは人を怠慢にさせる教えであり、キリストが万人の罪を贖ったという教義は人を墮落に導く」と言う。しかし、実際に善行をもって世に貢献した人は、多くこの贖罪の教義を心の拠り所としてきた人たちである。この逆説（パラドックス）についてはここで論じないが、ユニタリアン教の贖罪説の理解は浅薄であることは言うておく。未来の存在を信じなくても現世で十分な事業を為し得ると論じる人や、未来の存在を信じるのは利己的であり、宗教の眼目は現世改良・進歩にあると見なす人は、贖罪説を軽視するユニタリアン教徒と同じだと見なさざるを得ない。

社会改良や現世的事業といった言葉は、この唯物的な社会においては、最も響きが良く、勇壮に聞こえる言葉

のように思われる。しかし、一步進んで「改良事業とはどのようなものか」を究めるとき、私たちはそれに明確な定義を付すことに苦しむ。これを家庭の改良、教育の拡張、慈善の実施、教会の進歩と呼ぶならば、これらの事業は人生の目的ではなく、その目的に達する方法である。また、「人生の最終目的は何か」という問題に対し、未来の永遠の存在を削除して、どうやって人の魂を満足させられる解明を得られるのか、知ることはできない。私は長年、慈善病院で働いているが、そこで治療を求める人々、またそれに従事する人々にとって、常に最高の励ましと慰めを与えてきたものは、未来の観念なのだ。病気が慢性化し、全治の望みが全く絶たれた時、それでも微笑んで天命に安んじ、薬物も効果がない時に、病者の苦痛を和らげるものは、未来存在の観念である。また、看護に従事する者であっても、どれほど我慢しても効果がないように見え、体が疲れ、精神がくじける時に、独り患者の枕元で心中に賛美の声を上げさせるものは、未来存在の観念である。「人は義務としてのみ愛の事業に従事すべきだ」という言葉は、自分に戦うべき罪がなく、外部に困難な問題がない時に発せられるのを聞くものだ。しかし、自己の理想とすべてが反対になり、心中の暗夜が力を加えてもお消滅しない時に、未来観念なしにどうして耐えることができるだろうか。

「未来の観念に頼らずとも現世でキリスト教徒の事業を成し遂げられる」などと言うのはやめるべきだ。この観念がないがゆえに、幾億もの人々の魂が卑しい思想の中に沈んでいる。この思想が確実でないがゆえに、多くの教役者の事業に真心がなく、推察力がなく、その牧会する教会に生命がない。未来の観念を持たない宗教は、宗教ではない。

未来の觀念が、現世における事業に及ぼす影響力は、実に最大なのである。

一、未来の觀念によつてのみ、現世の眞の価値を知ることができる

現世は、現世そのもののために価値があるのではなく、学校が学校そのものために価値があるのではないのと同じである。卒業後に働くべき社会があるからこそ学校に価値があるように、人生の五十年間は、永遠なる未来に入るための訓練所として無上の価値がある。現世は人の魂の教育所として見るべきものであり、永住の家として見るべきではない。私たちが現世で事を行うにあたり、この觀念を持つか持たないかは、心の傾向や事業の性質に非常に大きな違いをもたらすことは明らかだ。見よ、多くの不満が未来の觀念を持たないことから生じているのを。見よ、多くの事業がこの觀念を持たないがゆえに、性急で粗雑な結果で終わっているのを。現世の事業は事業そのもののためではなく、それに従事する者がそれによつて得る経験、鍛錬、忍耐、愛の心にある。キリスト教は事業よりも精神を尊ぶ。なぜなら、精神は死後永遠まで存続するものであり、事業は現世と共に消滅するものだからである。ある中国の宣教師は四十年間伝道に従事し、一人の信徒も得なかったが、喜びをもつてこの世を去つた。彼は何も得なかったのだろうか。いいや、師父ザビエルは東洋で百万人以上に洗礼を施したと言われるが、おそらく現世から得た眞の結果においては、この無名の宣教師には及ばなかっただろう。ああ、事業よ、事業よ、どれほどの偽善と卑劣な手段と嫉妬と争いが、あなたの名によつて引き起こされたのだろうか。

二、未来の觀念があるがゆえに、私たちは心に平和がある

安心は事業の成功において最も重要な要素である。「急げば事をし損ずる」という諺は、私たちが皆経験するところである。ゆつたりとして余裕のない者が大事業を成し遂げたという話は聞いたことがない。「一年間に必ずこの事業を成し遂げなければならない」、「一生の内にこの事業を終えなければ死んでも死にきれない」という心構えは、その事業を完成させることができないことの兆候である。五十年を存在の極限と認める者は五十年間の業を行い、永遠を人生の生存期限と信じる者は永遠にわたる事を成し遂げることができる。使徒パウロの現世的事業は、彼がまさにこの世を去ろうとする時にはほとんど皆無に帰したかのようにであったが、それでも壮士の大望を抱いて断頭台の露と消えたのは、彼に未来永遠の望みがあつたからにほかならない。未来の観念を持たない人の現世における事業は、推して知るべしである。ドイツの宰相ビスマルクは言つた。「もし私に詩人の言う未来がなかつたならば、私は一日たりとも私の責任に耐えることはできなかっただろう」。詩人ゲーテは言つた。「急ぐな、休むな」。しかし、もし人間の發達が現世をもつて終わるものとするならば、真面目で正直な人は、どうしても急がないでいられるだろうか。聖アウグスティヌスは永遠の救いを信じた後で言つた。「私にこの信仰がなかつたならば、私は性急な突進のために何も成し遂げることができなかっただろう」ビルマの伝道師ジャッドソン氏は死に際し、神に祈つて言つた。「私にあと数年の命を与えてください。永遠の休養は私の前にあるのですから、私はなお現世で働きたいと願うのです」。未来の観念が現世における事業に関係ないなどと言うのはやめるべきだ。

三、未来の観念は魂の救いの上で必要である

パウロは「私たちは望みによって救われる」と言つた。これは心霊上の深遠な経験であり、希望が人の魂に及ぼ

す最高の力を示した言葉である。希望は生命の特徴であり、希望を失って生命があることはない。農夫が炎天下で耕すのは、秋に収穫の希望があるからである。漁師が広い海に釣糸を垂れるのは、夕暮れに家族に迎えられて漁獲を祝されるという希望があるからである。希望をなくして人生はない。希望は実に人生そのものである。

しかし、現世の希望は有限の範囲に私たちを繋ぎ止めることはできるとしても、無限の生命を持つ人の魂は、現世的な希望をもつて満足することはできない。酋長タマルが広大な領土を得てなお地球表面の狭隘さを嘆じたように、フランス国王ルイ十四世が無上の栄華と権力に達してなおベルサイユ宮殿で悲哀をもつて老年を終えたように、詩人ゲーテが名誉の極みにいながらなお「私の一生の中で快樂を感じたのはわずかに二週間であつた」と言つたように、いかに現世を使いこなしても、人の魂はそれに依つて安住し得るものではない。また、私たちの心霊上の実際的な経験や歴史上の観察から言つても、もし現世のみが人の魂の存在の極限だと見なすならば、最も成功した生涯も失敗と失望と言わざるを得ない。ある人は「人が各自その理想に達した時、すなわち命を終る時である」と言つた。現世に常に不満を抱くのは、必ずしも失意や失望の人だけではない。ところが、この失望の世界に立つて、死んでもなお望みを失わせないものは、未来永遠の観念である。高潔な思想が世間の愚かさや圧制に遭つて発表できない時、純粹で正直な信仰が迷信や偽善のために迫害される時、忠義や貞操が世を離れ、凡庸な人やよこしまな妻が世にのさばる時、未来の観念を除いて、何が義士の希望となり、貞婦の励ましとなるものがあるだろうか。私たちは永遠の罰を恐れて悪を避けたり、報償を得るために善を行つたりはしないが（仮にそのようなことができたとしても）、無限なる未来の希望は、私たちの魂を有限の境界以上に解放し、下等な肉

欲の支配から免れさせるものである。キリスト教が与える未来の希望を、回教その他の宗教が与える肉欲的な未来の快樂と同視し、この希望に生きる者を「異教的キリスト教信徒」と呼び、現世的宗教を勧める人々の考えは、私には理解できないところである。

未来の觀念が現世の事業に及ぼす影響力は、この通りである。そして、私たちはこれを歴史に照らしてみると、永遠至大の事業を成し遂げた人は、未来の觀念が最も確實であつた人なのだ。もし主イエス・キリストの一生を現世的事業の上から評価するならば、私たちはそれを失敗の生涯と言わざるを得ない。しかし、彼の事業はこの世界が消え去つた後もなお存続するものだから、彼は他人を救うことはできても、自身を救うことはできなかったのだ。誰が、使徒パウロの一生を評価して、彼の心中に存在した未来永遠の榮光という一つの大きな希望が、彼に現世の快樂を塵埃のように思わせ、百の困難千の苦しみに遭つてもほとんど無感覺にさせた原動力であつたことを見抜けないだろうか。ボスボラス海峡の岸辺で王冠を戴く悪女ユードクシヤの肝を冷やし、直言してついに身を山間の僻地に退け、愁苦をもつて生を終えた金口（きんこう）クリュソストモスの宗教は、いわゆる現世的宗教だつたのだろうか。無限の威力を有し勝ち誇つたローマの軍を率いて、まさに凱旋の讚美を捧げようとしてみラノ府の天主堂に入ろうとする帝王テオドシウスを門で押し止め、入ることを許さず、ついに数十日の懺悔をさせ、悔悟の状を呈させた豪勇なる聖アムブロウスの宗教は、未来の觀念という深遠なる思想に満ち満ちた宗教ではなかったのだろうか。歴史家フルードは言つた。「清教徒革命時代の英国は、世界史上で最も偉大な英雄を生み出した時代である」と。そして、清教徒革命時代から未来の觀念を取り去るならば、その最も高尚なもの、

最も尊敬すべきもの、最も男らしいもの、最も偉大なものを取り去ることになる。ミルトンの詩編から未来の觀念を取り去ってみよ。誰がその比類なき優美さを称賛するだろうか。バンヤンの『天路歷程』から未来の觀念を取り去ってみよ。無数の読者に感涙で袖を濡らさせた秘密を取り去ってしまったことになる。未来の觀念を持たない者として無冠の王クロムウエルの生涯を見てみよ。意義がなく目的のない、偽善的で最も憎むべき生涯となる。この觀念をもつて、ベイン(ジェームズ・ベイン)は処刑を受け入れた。この觀念をもつて、老牧師ロビンソンは神を讚美しつつ世を去った。「自由の発達において最も功績があつたのは十七世紀の英国人であり、そして未来の觀念が最も確實であつたのも十七世紀の英国であつた」。私たちはこれ以上何を言う必要があるだろうか。詩人ダンテ、改革家フス、探検家コロンブス、哲学者ベーコン、天文学者ガリレオ、科学者ニュートン、音楽家ヘンデル、慈善家ハワード、愛国者ジョン・ブラウンらのことを語るには、時が足りない。

思い描いてみよう。十三世紀の中頃、ギリシャの文学と美術の復興と共に、人類は再び現世を樂園と見なすに十分であつた。なぜなら、ギリシャ文明は現世的な文明であり、現世はギリシャ人にとつての極楽だつたからである。キリスト教が未来を説くに至り、ギリシャ的な觀念はたちまち衰え、ついに中世の暗黒時代になるにあつて、高尚なキリスト教的な未来の觀念は変質し、怠惰な隠遁僧侶のために濫用され、その感化力を失うに至つた。その反動としてのルネサンス時代は現世的宗教となり、メデイチ家の文明の教え(ペイガニズム)となり、ついにボルジア家の偶像崇拜(ヒーザニズム)となるに至つた。しかし、詩人ダンテのような人、改革家サヴォナローラのような人がいて、一方は当時の浅薄な思想を攻撃し、他方では隠遁主義に反対し、よくキリスト教最

始の思想を伝えたことによって、宗教改革時代が至ると共に、宗教の教理と世の文明が共に並行して進むようになった。ところが、また十六世紀と十七世紀の宗教的文明と文明的宗教は、十八世紀の初めに至って生命のない乾燥した定義の教え（ドグマティズム）と化し、天国の鍵が再び神学者という階級の手に戻るに至るや、ドイツにレッティングという巨人が現れてこの「老いぼれ」（神学者を指す）の頭上に一撃を加えた。それからゲーテが賛同し、シラーが助け、ついに十九世紀今日の思想を誕生させるに至った。蒸気や電気の発明、学術の進歩、憲法政治の発達は、現世を再び快樂なる住み家とした。「現世を改良すべきだ、これを天国とすることができなのだ」というのは、十九世紀今日の有望な人々の夢想であり、ペリクレスがアテネを支配した時、ロレンツォがフィレンツェの権力を握った時に同じく発せられた夢想であった。しかし、夢想は事実よりも大きくなることはできない。現世は価値がないものではないが、永遠の価値を有するものではない。人類は現世を楽しむことができるが、未来の希望を持たずに楽しむことはできない。

私たちキリスト信徒である者は、時流を利用することはあっても、どうして時流の子どもとなるべきだろうか。キリストの贖罪と未来の存在は、共に私たちの頼むべき大きな磐石であり、世のそれに対する思想がどのように変化しようとも、私たちのそれに対する信仰と希望は昨日も今日も明日も変わるべきではない。